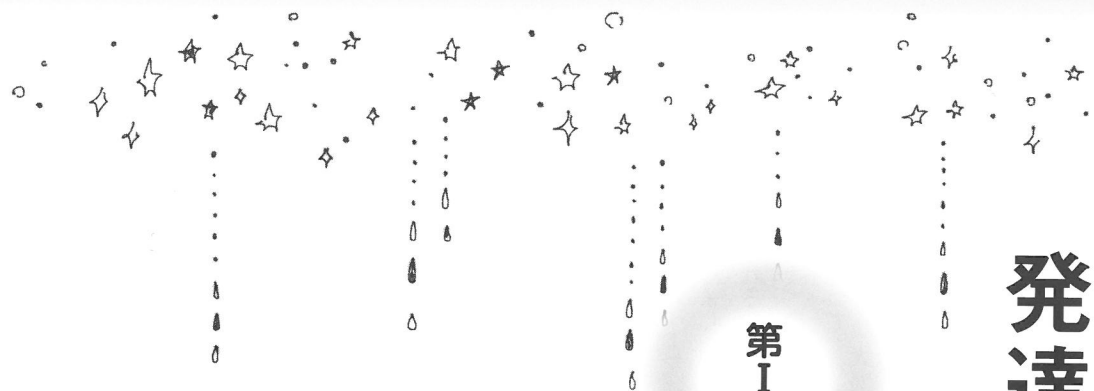


# 発達の中の

# 煌めき

## 第1部 障害のある子ども・なかまの発達



う事態に見舞われ、天津市の公衆衛生生活や母子保健活動は「近畿住民の水がめへの危険にたいする適切な対応」という課題にも直面することになりました。こうした状況に対し、「住民の健康をその初期から守ろう」とする行政、医師会、近江学園などの協力・共同のなかで、乳幼児健診活動は試行錯誤を積み重ねていったのです。1972年に誕生した革新市政も大きな後押しとなりました。

戦後に創立された近江学園は、重い障害のある子どもたちの発達保障実践を開拓しつつあったのですが、市からの要請を受け、障害の早期発見・早期対応と、育児を真に応援できる乳幼児健診に変革していくべく「発達診断チーム」として参加していくことになりました。その背景には、入所している子どもたちに対してだけでなく、「地域に根ざし、地域と協力して、地域のすべての子どもの健康と発達を保障していく体制をつくっていく」であろうとした、草創期の近江学園の精神がありました。

健診の方法や実施時期も少しずつ見直されていき、1974年からは、4か月児健診、10か月児健診、2歳児健診が集団健診として実施されるようになりま

## 白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。天津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

## 第3回 子育てを応援する地域づくり —「新しい発達力」が親、地域、社会を変える

私たちは、学生・院生時代から自治体のおこなう乳幼児健診の場に参加させてもらってきました。その後、正久は病院で、恵理子は天津市で発達相談員として勤務することになります。乳幼児健診での仕事は、子どもと親にとって、社会につながる扉でもある発達保障の出発点をどうつくるのかを問われるものでした。

### 天津市における乳幼児健診の歴史から

天津市では、1970年代前半に全国に先駆けて早期発見・早期対応のシステム「大津方式」をつくりあげてきました。児童福祉法、母子保健法に3歳児健診が位置づけられるのは60年代になってからですが、天津市では戦後すぐから乳幼児健診を実施し、多くの関係者が努力を重ねていきました。当時はまだ栄養不足による発育不良児も多く、ミルクの適正な配給を実施することが目的でした。「強い兵隊さんを生み育てる」という戦前の価値観の残滓もあり、身体の大い子どもを「健康優良児」として表彰することもありました。また、天津市は琵琶湖の南岸に位置していますが、高度経済成長期に入った50年代後半から多くの企業誘致によって琵琶湖の汚染が進行するとい

す。実践的に検証し決定してきた健診の時期でしたが、発達の合法性の解明が進むにつれて、重要な時期であることが確かめられていきます。

### 「生後第2の新しい発達力」の誕生と10か月児健診

4か月、10か月は、それぞれ乳児期前半、乳児期後半の発達の階層における第2段階から第3段階への移行期です。同時に、次の階層への飛躍を準備する力、すなわち「新しい発達力」が誕生する時期にあたります。その力が誕生していくということは、次の質的転換期で障害が顕在化していく可能性があることから、障害の早期予知・早期対応につながるべきです。

5月号では、「生後第1の新しい発達力」が誕生すると（通常4か月ころ）、いろいろな事物や人間関係を取り込んでいくための「心の窓」が開かれていくことを述べました。乳児期後半になると、その「心の窓」によって実際に外の世界を確かめ、自分のなかに取り込んでいきます。その外の世界との接点（結び目）の数が、1つ、2つ、3つと増えていくのが乳児期後半の発達の姿です。

しかしそれは、子どもにとって決して楽しいだけではありません。外の世界を確かめていくなかで、ドアやカーテンに隠れた向こう側の世界や、ちよつと先に起こることに心寄せられるようになります。「見えない世界」「未来」への気づきです。それは不安な心をも呼び覚ましませす。でも、イナイイナイバア遊びやぐり遊びでは、次に楽しいことが待っています。そうして不安を期待につくりかえてくれるおとなのことが大好きになり、それを心の拠り所にしながら、子どもたちはまた、新しい世界に足を踏み出していきます。

10か月ころは、両手にモノを持って遊ぶような2つの結び目をつくったうえで、3つ目の世界にも気づいていく時期にあたります。健診では両手に持った積木を打ちあわせる遊びをするのですが、3つ目の世界への気づきは新たな葛藤をもたらしませす。「この人は何をしようとしているのかな」「この遊びをすること求めているんだな」と、幼いながらも鋭く相手の意図に気づきはじめます。その相手の意図に向きあうためには、「やってみよう」と思える自分の意図がより確かなものになる必要があります。